

○県内のカキ産地では、生産者の高齢化による栽培面積の減少、それに伴う生産量の減少が課題。

○県育成のカキ新品種「秋王」は、良食味で、種がほとんどないという優れた特徴があり、導入を推進して、生産者の確保、安定生産技術の確立による経営安定を目指し活動。

○平成28年には栽培面積34ha、出荷量13tとなり、生産者の組織化も進展。

具体的な成果

1. 栽培面積の拡大と結実率、品質の向上

○栽培面積と出荷量は、平成24年の1.3ha、2.2tから、28年には34ha、13tに増加

○生産上の課題として、生理落果が多く、結実が不安定なため、結実安定対策を検討、実施

○果面障害（サビダニ、汚損等）対策による秀品率の向上

「秋王」の栽培面積および出荷量の推移

年	24	25	26	27	28
栽培面積 (ha)	1.3	11	24	32	34
出荷量 (t)	0	0	2.2	6.7	13

2. 栽培マニュアル作成による技術普及

○品種特性に基づく、特徴的な生産技術対策を周知

- ・結実管理
- ・防除対策
- ・新梢管理

○栽培技術の平準化



3. 農家所得の向上

○販売単価（H28年）722円/kgと既存品種「富有」の約2.8倍

○10aあたり所得は、収量1.5tを確保すれば30万円を超え大幅に向上

4. 「秋王」のブランド化促進

○ポスター、リーフレットを作成

○PR動画を作成し、Web上で公開



普及指導員の活動

1. 結実安定のための技術開発

- ・試験場と連携した技術開発
- ・現地ほ場で技術を実証、改善技術を組み立て



2. 開発技術の普及

- ・結実安定対策  
樹勢に応じて、ジベレリン処理、環状はく皮、ワイヤリング等を実施
- ・果面障害  
防除の徹底、ジベレリン処理後の滴落としの徹底



3. 生産者の組織化

- ・JA部会内に「秋王」生産者で研究会を設立し、地域内で定期的に現地検討会等を実施
- ・JA部会青年部で、早期成園化のために、2年生大苗を育成



普及指導員だからできたこと

- ・新たな生産技術を試験場と連携しながら、コーディネート機能を発揮して現地実証するとともに、ほ場ごとの樹の状態に合わせた細やかな技術対策を支援

- ・品種特性に応じた現地技術を組み立て、開発技術の早期普及を図るため、生産者組織を新たに設立

## カキ新品種「秋王」の生産振興

活動期間：平成26～28年度

### 1. 取組の背景

福岡県は全国第3位のカキの生産地ですが、価格の低迷、天候不順による病虫害や生理障害の多発等、厳しい経営が続いている。

一方、県で育成した新品種「秋王」は、糖度が高くサクサクした食感で大変美味しく、きれいな橙赤色で、種がほとんどないという優れた特徴を持っており、平成24年から「秋王」の導入、推進に取り組んでいる。

しかし、「秋王」は、生理落果が多く、結実が不安定という欠点を持っており、結実安定のための新たな技術確立が求められていた。

そこで、平成24年から県域のプロジェクトとして位置づけ①結実安定技術の開発と普及②生産者の組織化による生産技術の早期普及、安定生産を目標に課題解決を行った。

### 2. 活動内容（詳細）

#### （1）結実安定のための技術開発

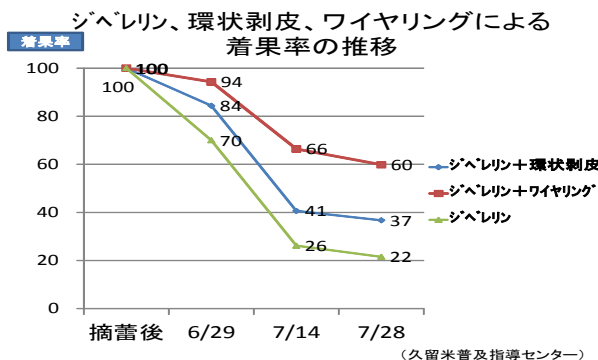
県試験場と連携し、効果的な結実安定技術を検討した。試験場で効果が認められたジベレリン処理を、現地ほ場で実証した結果、園地条件や樹勢によって効果が異なったため、改善技術を検討した。その結果、ジベレリン処理以外にも、環状はく皮、ワイヤリングの効果が認められた。

果面障害は、現地で栽培を始めて問題となり、開花期前後の灰色かび病、サビダニ等の防除の徹底や、ジベレリン処理後に薬液の滴を落とすことで軽減できることが明らかとなった。

#### （2）開発技術の普及

開発技術の特徴を図に示した。各普及センターでは園地条件や樹勢に基づいて結実安定技術の種類を選択して普及が進められている。

具体的には、樹勢の落ち着いた樹ではジベレリン処理、樹勢が強い場合は環状はく皮、樹勢が中程度の場合はワイヤリングとするなどの選択基準を示しながら、状況に応じた対策を講じている。



#### （3）生産者の組織化

JA 部会内に「秋王」生産者で研究会を設立し、地域内で定期的に現地検討会等を実施して、生産者相互間の意見交換、技術の向上を図っている。

さらに、JA 部会青年部で、2 年生大苗をポットで育成しており、ほ場定植時の植え傷みを軽減し、早期成園化による経営安定を図っている。

### 3. 具体的な成果（詳細）

#### (1) 栽培面積の拡大と結実率、品質の向上

栽培面積と出荷量は、平成 24 年の 1.3ha、2.2t から、28 年には 34ha、13t に増加した。生産上の課題として、生理落果が多く、結実が不安定なため、結実安定対策を検討し、園地の状態に応じた対策を実施している。

また、果面障害（サビダニ、汚損等）が発生しやすいため、防除等の対策により秀品率の向上を図っている。

栽培面積および出荷量の推移

年	24	25	26	27	28
栽培面積 (ha)	1.3	11	24	32	34
出荷量 (t)		0	2.2	6.7	13

#### (2) 栽培マニュアル作成による技術普及

県域のプロジェクトチームでこれまでの取り組みで明らかになった、特徴的な生産技術対策を取りまとめて、技術者向けの栽培マニュアルを作成した。

高品質果実の安定生産のための結実管理、防除対策、新梢管理について周知することで、栽培技術の平準化を図っている。

#### (3) 農家所得の向上

販売単価（H28 年）は 722 円/kg と高く、既存品種「富有」の約 2.8 倍となっている。10a 当たり所得は、収量 1.5 t を確保すれば 30 万円を超え、大幅に向上する。

#### (4) 「秋王」のブランド化促進

ポスター、リーフレットを作成するとともに、PR 動画を作成し、Web 上で公開している。また、小川県知事による東京市場、果実店でのトップセールスも実施している。



写真 小川県知事によるトップセールス  
（左：新宿伊勢丹、右：東京市場）

### 4. 農家等からの評価・コメント

「秋王」は、カキ産地の活性化を図るうえで欠かせない品種と考えている。結実安定技術による収量確保、ブランド化による有利販売など、今後も関係機関の一体となった支援をお願いしたい。

### 5. 普及指導員のコメント

産地内に研究会を設立し安定生産技術の早期普及を図るとともに、青年部で2年生大苗の育苗をすることで、早期成園化を図っている。今後も普及を進めていくために、特に生産安定対策、販売対策等について関係機関の協力をお願いしたい。

## **6. 現状・今後の展開等**

これまでの活動により、結実安定対策などある程度の成果が挙がり始めている。これから結実の始まる若木が多いため、順調に生産量を伸ばし、安定した市場評価を得るためにも、引き続き、栽培面積の拡大、生産安定技術の向上を目指していく。